

川崎病類似の冠動脈炎作製実験の試み

— 抗原作製の立場から —

東邦大医公衆衛生 村 田 久 雄

川崎病患児の糞便から、カンジダが他の健康児に比し、高い菌数で検出されることを以前に報告した。そこでこのカンジダ菌交代現象について種々考察し、動物実験を繰返した結果、カンジダ菌体抽出液をマウス腹腔内に再感作することにより、実験的に川崎病類似の冠動脈炎を惹起せしめたので報告する。

さて、感染症の1つの型として病巣感染があげられる。つまり宿主のどこかに慢性的な原病巣をみとめるが、それ自身は一般に無症状で、ときにこの原病巣から離れた諸臓器又は組織に反応性の器質的・機能的障害を起してくるという事実である。さらに、一般に真菌症はアレルギー性症状が強く発現することが知られており、一般に初感染後2カ月前後で発現するといわれている id 反応などもしばしば経験する。以上の如くカンジダ菌交代現象がこの病巣感染の1つの基盤となりうる可能性と、川崎病患者にみられるアレルギー様症状が id 反応の1つとして説明し得る可能性を検討する目的で実験モデルを組み実施した。

I. 抗原作成

Candida albicans をサブロー培地で 36°C、48 時間培養後、生食水で3度洗い、遠沈。沈澱物を 0.1 n KOH (200 mg/dl) を加え 37°C で一昼夜振盪、その上清を pH 7.2 に補正し抗原とする。

II. 実験方法

dd 系マウスに抗原 0.2 ml を5日間連続腹腔内注射、普通食で飼育。第5週目第1日より再び同様操作を行った。実験開始後10週で屠殺した。この方法を基本とし、テトラサイクリン投与群、1回のみ感作群、抗原量を 1/10 とした群など3度に亘って実験を行った。

III. 実験結果

基本的な実験群にのみ3度とも 20~37.5% の割合で冠動脈のみに配局した増殖性血管炎を作り得た。病理学的には聖マ医大病理より報告されるが川崎病類似変化と考えられ、同病解明の上に極めて有用なものといえよう。

Candida 抗原を用いての冠動脈炎作製実験の試み

— 病理形態学的立場から —

聖マリアンナ医大・第二病理 高 桑 俊 文 増 田 弘 毅
直 江 史 郎
東邦大医・公衆衛生 村 田 久 雄

我々は数年来、川崎病剖検例の病理学的検索を行って来ているが、同時に川崎病病因解明の一助となすべく、川崎病類似病変の動物モデルを作成するため試行錯誤をくり返して来たが、満足な結果を得られなかった。今回、川崎病患児の糞便より培養した *Candida albicans* (MC LS-2) より作成した抗原をマウスに反復注射することに

より、冠動脈に増殖性変化を主体とする血管炎が出来ることが解り、数回の確認実験も行ったので報告する。

I. 実験方法

dd 系マウスに我々の作成したカンジダ抗原 0.2 ml を5日間連続腹腔内注射後飼育、第5週目第1日より再び

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

川崎病患児の糞便から、カンジダが他の健康児に比し、高い菌数で検出されることを以前に報告した。そこでこのカンジダ菌交代現象について種々考察し、動物実験を繰返した結果、カンジダ菌体抽出液をマウス腹腔内に再感作することにより、実験的に川崎病類似の冠動脈炎を惹起せしめたので報告する。

さて、感染症の1つの型として病巣感染があげられる。つまり宿主のどこかに慢性的な原病巣をみとめるが、それ自身は一般に無症状で、ときにこの原病巣から離れた諸臓器又は組織に反応性の器質的・機能的障害を起してくるという事実である。さらに、一般に真菌症はアレルギー性症状が強く発現することが知られており、一般に初感染後2ヵ月前後で発現するといわれているid反応などもしばしば経験する。以上の如くカンジダ菌交代現象がこの病巣感染の1つの基盤となりうる可能性と、川崎病患者にみられるアレルギー様症状がid反応の1つとして説明し得る可能性を検討する目的で実験モデルを組み実施した。